

異境で生きる——
自由を知った——



ラモツォの 七命ノート

南山大学人類学研究所《映画上映・トークセッション》

10月14日（土）15:00~18:00

南山大学 R棟フラッテンホール

上映後、小川真利枝氏(監督)と小野正嗣氏(立教大学教授・芥川賞受賞作家)のトークセッションがあります。
参加無料・事前登録不要。

2017年/日本/チベット語/93分/カラー/ドキュメンタリー

読み書きのできないラモツォは、
旅の途上をビデオカメラに記録した。



政治犯の夫を待つ妻と、家族の6年の物語。

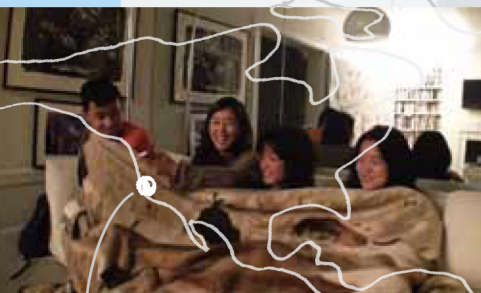
The Diary of a Tibetan Woman

Story

アメリカ・サンフランシスコ。ゴールデンゲートブリッジを車で颯爽と走るのが、主人公のラモツォ。彼女は、亡命チベット人。夫が政治犯として中国で逮捕され、突然、故郷へ帰れなくなった。最初の亡命先は、インドのダラムサラ。そこで彼女は、道端でパンを売りながら、4人の子どもと義父母を手ひとつで養った。学校へ行ったことがないラモツォが、人知れず続けていたのがビデオカメラで日記をつけること。その映像には、歴史に翻弄されながらも、前を向いて生きる一人の女性の姿がうつっていた。映画は、ラモツォがスイスをへてサンフランシスコに辿り着くまでの6年を、80時間におよぶビデオ日記とともに描いた。そして、夫の釈放の日が近づいてくる。



チベットの東北に位置するアムド地方。ここで最大の僧院ラブラン寺が、ラモツォの故郷。標高3000mの山麓にそびえる。



スイス チューリッヒ

ラモツォがいったとき身を寄せた。スイスは、ヨーロッパではじめてチベット難民を受け入れた国で、現在約5000人のチベット人がすむ。



インド ダラムサラ

標高1800mの山間の町。1959年ダライラマ14世が中国の脅威を恐れインドに亡命してから、チベット亡命政府が樹立されている。現在約6000人のチベット人がすむ。

チベット ラサ



チベット自治区の首都。標高3700m。ラモツォはこの町でバター売りをしているとき、レストランで働く夫に出逢った。

アメリカ サンフランシスコ

ラモツォが最後にたどり着いた町。米国はインド、ネパールについてチベット難民を多く受け入れている。ニューエイジ発祥の地であるサンフランシスコは、チベット難民が暮らしやすい文化が根づく。

Introduction

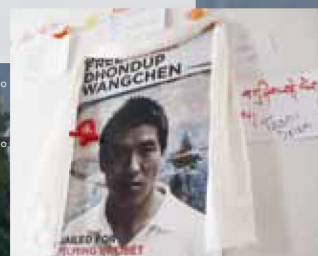
ヒマラヤ山脈の北に広がるチベットは、現在は中国の一部となり、宗教や表現の自由が制限されている。主人公ラモツォは、そこから標高4000mの山を越えて、歩いて亡命した。その彼女と2009年にダラムサラで出会ったのが、本作が劇場初公開作品となる映画監督の小川真利枝。インドの難民収容所から取材をはじめ、全編チベット語で撮影するために1年間ダラムサラに語学留学をしながら8年の歳月をかけて完成させた。

状況をカルマ(=業)として受け止め、打ちひしがれることなく、しなやかにしたたかに生きるチベット人の姿を読み取ってほしい。

——作家 渡辺一枝

〈ラモツォの夫 ドゥンドゥップ・ワンチェン〉

2008年北京オリンピックが開催されることについてチベット人のリアルな心情をまとめた映像を発表。すると中国政府の反感をかい懲役6年の刑を受けた。罪状は「国家分裂扇動罪」。しかし世界からは彼の勇敢な行動が讃えられ、ニューヨークのジャーナリスト保護委員会から「国際報道自由賞」が与えられた。



<http://www.lhamotso.com/>

お問い合わせ先 ⇒ 南山大学人類学研究所

Email : ai-nu@nanzan-u.ac.jp

Tell : 052-832-311 (代表)

HP : <http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/JINRUIKEN/>

Facebook : 「南山大学人類学研究所」で検索!

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

地下鉄名城線「八事日赤」駅より徒歩8分



主催: 南山大学人類学研究所

参加無料・事前登録不要

10月14日(土) 15:00~18:00

南山大学 R 棟フラッテンホール

15:00-15:05 挨拶: 後藤明(南山大学人類学研究所)

15:05-15:15 趣旨説明

15:15-16:45 映画上映

17:00-17:40 トークセッション: 小川真利枝(監督)
小野正嗣(立教大学教授・作家)

17:40-18:00 意見交換会